

「向田キヨウ子の悲喜劇」

山田えみこ

人物

向田キョウ子（10／37）小学生／家事手伝い

向田優子（7／34）キョウ子の妹、小学生／

家事手伝い

向田恵子（38／65）専業主婦

向田行男（40）営業マン

吉田比呂（10／37）小学生／会社員

黒川啓（10／37）小学生／会社員

小野翔（10／37）小学生／会社員

大丸大介（45）会社員

佐々木一夫（50）工場主

佐々木幸子（48）主婦

内川花子（36）主婦

小学生A、B

医師

看護婦A、B、C、D

老婆

母親

幼児

カップル男、女

運転手
子供 A、B、C
お巡りさん
乗客 A
群衆 A、B、C、D、E
事務員
患者の老人
患者の老人の妻
店の主人
警察署長
店主
客 A
A
B
C 1、C 2、C 3

○公園（朝）

夏、木々で蝉が鳴いている。恐そうな人相の向田キヨウ子（10）が、熱そうに汗を流しながら、鼻歌を歌い、じょうろで公園の花壇のひまわりや草花に水をやっている。ほかに人影はない。じょうろから、流れる水滴がきらきら光る。

キヨウ子「ふんふんふん、ふんふんふん……」

キヨウ子、ひまわりや、草花に顔を覗き込みながら、微笑む。

キヨウ子「お花さんたちも、夏だもん、お水が欲しいわよね。熱いからお水を吸って、元気になって」

キヨウ子、元気に水をやり続ける。

ひまわりが、水滴を浴びて輝いている。アゲハ蝶がひらひら飛ぶ。

○同

公園の時計が、12時ころを示している。

お昼のチャイムが鳴る。

公園の入り口に、子供たちがどっと流れ込んでくる。その中に、キョウ子と、妹の向田優子（7）、吉田比呂（10）、黒川啓（10）、小野翔（10）が、いる。

比呂「あ、昨日までしおれてた、ひまわりが元気になってる！」

ひまわりに気づいて、子供たちが花壇の前にわらわらと集まる。

キョウ子「よかった。元気になってくれたん」
キョウ子、そこはかとなく誇らしげに、誰かほめてくれないか、と周りを見回す。

啓「これ、水まいたの、…：な、翔」

と、翔と視線を交える。

自分を指さすキョウ子。

キョウ子に気づかずに、

翔「うん、そうだな」

キョウ子、啓と翔の後ろのほうで自分を指さしてうろちよろ。啓、翔はキョ

ウ子に気づかず、

啓「翔「あの子だ！」

と、うなずき合う。

うんうんうんうん、と声に出さずに首を縦に振るキョウウ子。

優子、別場所で、髪をくるくると指で巻いている。

啓「優子ちゃん！君だろ？」

優子「へ？」

いつせいに、優子のほうを振り向く子供たち。

優子「わ、わたしは……」

啓「照れなくてもいいよ。優子ちゃんに決まってる！」

翔「優子ちゃん、優しそうだもんな」

啓「優子ちゃん、やっぱりいい子だね。花が、枯れそうだったから、水やっただら？」

優子「え……」

優子・キョウウ子・比呂以外の子供たち「優子ちゃん、優しい。すごいね、すごいね」

優子、子供たちの輪の中心で、両手を振りながらおろおろしている。
キョウ子は、それを見て、子供たちの輪の外で、がっくりと肩を落とす。
その少し離れたところでキョウ子をじっと見ている比呂。

○マンション・向田家・キョウ子の部屋

キョウ子が、ドレッサーの前で自分の顔を覗き込んでいる。
髪をブラシでとかしたり、手櫛で整えたりしているが、嘆いて大きく溜息をつく。

キョウ子「ああー……！」

肩を落とす、両肩をぶらん。

○同・同・リビングダイニング（夕）

向田恵子（38）、キョウ子と、優子がテーブルに座っている。優子、手鏡を見て、髪をいじっているが、すぐ、食事

を始める。

三人、夕食の食卓を囲んで食事をして
いる。

向田行男（40）が、汗びっしょりで、
玄関のほうの入り口から入ってくる。

行男「はあー、まったく何だって、今日は、
熱いんだ。大変だったよー。ただいま」

キョウ子・優子・恵子「お帰りー」

行男「なんだ、先に食べてるのか？」

キョウ子、夕食をばくばく食べながら、
キョウ子「ねえ、お母さん。どうして私を優
しそうな顔に産んでくれなかったん？優子
みたいに優しそうで、かわいい顔に生まれ
たかった」

恵子「なにゆうてんの。あんたも、十分かわ
いい顔にうまれてんよ」

キョウ子「なぐさめなんて、いらんー」

キョウ子、すねて身体をくねくねさせ
る。

隣で、素知らぬ様子で、優子が夕食を

ばくばく食べている。

行男、新聞を広げ、読み始める。

恵子「あなた！食事中は新聞をやめい？」

行男「あ、ああ」

キョウ子「ねえ、おとちゃん、おとちゃんは
どう思うん？今日も、私のやったこと、優
子がやったと思われてん」

行男「ふはは、大丈夫。みんな、長いうちに
人のやっていることは見てるから。きつと
みんないつか、キョウ子がやさしいこと、
分かってくれるよ」

キョウ子「いややー、私、優子みたいに優し
そうな子に生まれたかったー。そしたら、
人生、得やんー」

行男「キョウ子……」

と、苦笑する。

恵子「キョウ子、あんたは、ひとによく思わ
れたいから親切にするん？」

キョウ子、食べ終わって、食器を置き、

キョウ子「ごちそうさま、ううん……」

と、少し考える。

恵子「ま、いっから、風呂入ってきなさい」

キョウ子「はい」

キョウ子、テーブルの上の食器を隣の

対面式キッチンシンクへ持っていく。

キョウ子「優子、行こう」

優子「はい」

恵子「優子、お姉ちゃんを見習って、食器を

流しに持っていきなさい」

優子「ええ？はい……」

優子、食器をシンクへ持っていく。

キョウ子と、優子、ばたばたと、リビング

ダイニングから、廊下へ出ていく。

○同・同・廊下（夕）

ばたばたと、キョウ子と優子、二人で

ふざけながら、風呂場へ向かう。

○同・同・リビングダイニング（夕）

行男、キョウ子と、優子が出ていった

廊下への入り口を眺めながら、食事を始め、

行男「あの二人、どうして、ああ正反対なんだか」

恵子、行男が、食べている傍で、雑巾がけしながら、

恵子「私が、産んで、こんなこと言うのもなんなんですがね。キョウ子が、不憫です。せつかく優しい子なのに、怖い顔で」

行男「ああ、たしかに優しい子だ。あのまま育ってほしいな」

恵子、やわらかな視線で行男をじーっと見ているが、

恵子「それより、あなた、営業の仕事のほうはどう？この暑のに、外回り」

行男「ああ、仕事もお客も待ってくれないからな」

行男、ご飯をかきこむ。

恵子「気を付けてくださいね、熱中症、今、多いですから」

行男「ああ、そういえば、この間の健康診断は、どうだったかな」

恵子「あなた、そういうことは、しっかりしててくださいね」

行男「大丈夫だよ。おい、ビール」

と、ビールのジョッキをひよいと、飲むしぐさをしてウイंकする。

恵子、肩をすくめてキッチンへばたばたと向かう。

○通学路（朝）

数人の子供たちが、通学途中。

キョウ子と、優子、比呂も一緒に歩いている。

後ろからやってきた小学生A、Bが、キョウ子をからかう。

小学生A・B「やーい！キョウ子ー！怖い顔、怖い顔！」

比呂「やめろよ！」

と、言っって追い払う。

小学生 A 「優子ちゃんは、かわいいのに」

小学生 A、B は、キョウ子と、比呂と

優子の三人をはやし立て走り去っていく。

それを見送り、キョウ子、気を取り直し、

キョウ子「なあ、もうすぐ成績表でるけど、成績どうなんな？」

優子「私は、ちょっと、自信あんねん！ねえ
ちゃんは知らんけど、比呂くんは成績いい
けんねえ」

比呂、照れて頭をかく。

後ろから、啓と、翔がぱたぱたと走ってきて、

啓・翔「おはようー」

と、キョウ子、比呂、優子の肩をそれぞれ叩く。

啓「おい、昨日、角んとこの大きな犬が、いなくなっただって」

優子「え？あんな、おおきな犬が？こわーい」

翔「キョウ子が、食べたんとちゃうかー？」

比呂「やめろよ、そんなこと言うの」

啓「なんだい、比呂は、いつもキョウ子をかばうな。惚れとるんか？」

比呂「ちゃう！」

ぱたぱたと、むくれて、比呂、先のほうへ走り去っていく。

その後ろ姿を見送って、優子、

優子「啓君、ひどいよ？そんな、からかい方ないやん！」

頭を搔いて、照れている啓の脇で、キョウ子、優子、走り去る比呂を見つめている。

○小学校・昇降口（朝）

キョウ子と、優子、くつを靴箱に仕舞い、上履きに履き替える。

○同・廊下（朝）

キョウ子と、優子が廊下から階段に上

がろうとする。

数段上がったところで、優子、キョウ子
子が下で上がって来ないのに気づく。

優子「ねえちゃん、はよ行かんと、遅刻する
よ」

キョウ子「いいよね、優子は、私と違って：
」

優子「うん？何ゆうてん、はよせんと、遅刻
するよ」

キョウ子「知らん。優子なんて知らん」
そのまま、優子を通り越して階段を走
り上がっていくキョウ子。

優子、目で追いかけて、

優子「ねえちゃん……」

取り残される優子。階段を登っていく
キョウ子。

○同・優子の教室（朝）

優子、ランドセルから、教材を取り出
しながら、手で涙を拭いている。

○同・キョウ子の教室（朝）

キョウ子、ランドセルから、教材を取り出しながら、手で涙を拭いている。

○同・校門

下校のアナウンスが流れる。

アナウンスの声「（声は、次第にフェイドアウトしていく）生徒のみなさん、寄り道をせず、まっすぐ、安全に帰りましょう。道路の規則を守り、仲良く手をつないで、知らない人にはついていけないようにしましょう……」

校門から、キョウ子が、うつむいて出てくる。

優子、追いかける。

優子「ねえちゃん」

ばたばたと、優子、キョウ子に駆け寄り、

優子「ねえ、ねえちゃん、何、怒ってるん？」

キョウ子、答えない。

優子「ねえ、ねえちゃん」

優子、キヨウ子に手を伸ばすが、キヨウ子、その手を振りほどく。

立ち止まって、優子、

優子「ねえちゃん」

キヨウ子、うつむいたまま、早足で歩き去っていく。

取り残される優子。

優子を背に、

キヨウ子「もう、知らん！優子なんて知らん！もう、嫌や。もう、嫌や！」

キヨウ子、うつむき加減に、悔しそうに、速足ですたすたと歩いていく。

○国道の歩道（夕）

陽炎が立つ。

人がたくさん行き交っている。

あえいで、歩いていく行男。

汗びっしょりで、ハンカチで汗をぬぐう。

息が荒く、ふらふらしている。
目も泳いでいる。

突然、立ち止まり、大きく息を吸った
かと思うと、ふらっと意識を失って倒
れてしまう。

行男が倒れたところに、群衆が群がっ
てくる。

○病院・廊下（夜）

キョウ子「おとやん、おとやんが、
食って掛かってい
る。両こぶしで、恵子をどんどんと叩
いている。

キョウ子「なんでや！なんで、おとやんが、
こんな目にあわなあかんの？なんでや！」

その横で、優子が泣きじゃくっている。

優子「ええーん、ええーん」

キョウ子「おとやん、おとやん！」

恵子「キョウ子、おちついて」

キョウ子「私が、優子虐めたからか？悪い子
やったからか!？」

そこへ、看護婦 A が、行男の入っている病室の戸を開けて、キョウ子、優子、恵子の三人に声をかける。

看護婦 A 「ご家族の方、入ってください！」

恵子 「主人は……？」

看護婦 A 「……重篤な熱中症です、もう……」

と、看護婦 A、首を横に振る。

○同・行男の病室・中（夜）

あわてて、病室に入る、キョウ子、恵子、優子。

恵子 「あなた！」

キョウ子・優子 「おとやん……！」

医師 「もう、意識は戻らないと思います。最後の別れを」

病室の中に、バイタルチェック機の心音が聞こえる。

キョウ子、優子、恵子が、行男のよこたわっているベッドに駆け寄る。

キョウ子 「おとやん！」

継り付いて、狂ったように揺する。
行男、ベッドに横たわって眠っている。
行男の瞑ったままの目から、一筋の涙。
バイタルチェック機のアラーム音が、
平坦に。

○マンション・向田家・リビングダイニング
リビングの一角に、行男の微笑む遺影
が立てかけてある。
それを向こうに透かして、揺れるレ
スのカーテン。
チリーンという仏壇の鐘の音。

○公園

キョウ子、喪服を着て、花壇のひまわ
りを覗き込んでいる。じーっと見つめ
たまま。無表情。

○公園

向田キョウ子(㊦)が、花壇のひまわり

を覗き込んでいる。かすかに口角を上げて。喪服を着ている。

遠くから、優子の声がする。

優子の声「おねえちゃん」

キョウ子が、振り向く。

優子の声「おねえちゃん、おとさんの法事に行く時間よー」

キョウ子「はい」

キョウ子、後ろを振り向く。

向田優子（34）も喪服。公園の入り口で、キョウ子に手を振る。それから、手鏡をのぞいて、髪形を整え、化粧パフを顔にはたく。

キョウ子、公園から走り出て、優子の所へ行く

キョウ子と優子、公園から走り去っていく。

○寺・法事の会場

お堂に、キョウ子たちの親戚が詰めか

け、頭をうなだれて手を合わせ、座っている。

お坊さんの読経が響く。

向田恵子（65）、キョウ子、優子が、前のほうで手を合わせ、座っている。

お経を聞きながら、キョウ子、前の行男の写真を見つめ、

キョウ子「（小さな声で）おとやん、あたし、優しい子で、居続けるからね。悪い子にはならんから」

お坊さんのお経が続く。

キョウ子「天国で、安心しててや」
手を合わせたまま、目を瞑り、じっと祈るキョウ子。

○マンション・向田家・リビングダイニング
蝉の鳴いている声がする。

リビングの片隅に、行男の微笑む小さな遺影が立てかけてある。

レースのカーテンがそれを透かして揺

れている。

風鈴の音。

○走る電車の中

キョウ子と、優子、ちよつと離れた席に座り、電車に乗っている。

キョウ子のまわりは、ガラガラ。

優子の周りの席はギュウギュウで、席の周りの立ち客もいっぱい。

○マンション・向田家・キッチン

キッチンで、キョウ子が料理をしている。

鍋をかき回しながら、深く何度も納得したように頷く。

○同・同・リビングダイニング

料理を持って入ってきて、行男の遺影の前に来ると、料理を置くキョウ子。

遺影の前で、手を合わせ、祈る

○ 駅の出口（夕）

ザアザアと、雨が降っている。

キヨウ子が、改札口から出てきて、空を見上げる。

キヨウ子は、傘を広げる。

ふと、隣を見ると、傘を持たず困り顔の老婆。

キヨウ子は、持っている傘を老婆に（貸そうか？）と、身振りをする。

老婆は、キヨウ子の怖い人相を一目見て、体が固まり、慌てて手を振って（いいです）という風に断る。

それでも、キヨウ子は、何回か傘をすすめる。思いつきり笑顔で。

老婆は、仕方なさそうに、恐る恐る傘を持ち、お礼をして去っていく。

そのまま、キヨウ子、ひさしで雨宿りをするが、雨は降り続ける。

キヨウ子が、じーっと空を眺めて立ち尽くしていると、隣に、かわいい若い

女性が来る。

改札口から、若い大学生風の男性が現れる。

キョウ子の顔を見て、男性はぎよっとするが、通り過ぎて、キョウ子とかわいい若い女性を見比べ、若い女性に傘を差し出す。

女性は、一回、断るが、男性は、首を振って、傘を渡して、雨の中、走り去っていく。

かわいい若い女性は、キョウ子を一瞥する。

かわいい若い女性「……」

かわいい若い女性は、傘をさして、そのまま去っていく。

キョウ子は、ずっとそこに残り続ける。

雨は、降り続く。

だんだん、日が暮れて、暗くなってくる。

通り過ぎる車が、水たまりの水を跳ね

上げ、キョウ子に、びっしりと掛け
ていく。

○商店街・祭りの歩行者天国

大勢でにぎわう歩行者天国。

キョウ子、店で水風船を買う。

キョウ子「おばさん、これください」

汗を流しながら、水風船をもてあそび、

歩くキョウ子。

楽しそう。

混んだ道でベビーカーに乗った2歳く
らいの幼児と、歩いている母親とすれ

違う。

突然、

幼児「あれー！ママ！あれが欲しいー！」

と、幼児、キョウ子の水風船を指さし
て叫ぶ。

母親「だめよ、もう、お金がないわ……」

幼児「いやー！いやー！」

母親「だめよ、今日は買いに行けないの」

キヨウ子は、しばらく、振り返ってじつと、母親と幼児のやり取りを見ているが、

母親「困ったわね……」

キヨウ子「お母さん」

母親、キヨウ子のほうを見る。

キヨウ子「私のでよろしかったら、これ、どうぞ」

キヨウ子の顔を見ると、幼児は、怖い人相に、ぎよっとして、泣き始める。

幼児「うえーん、怖い顔」

母親「すみません……」

キヨウ子「いえ……」

幼児は、泣いているが、それでも、水風船を見ている。

キヨウ子、苦笑して、水風船を手渡す。

母親、恐縮しながらも、おずおずと、礼をする。

母親「す、すみません……」

キヨウ子は、にっこりと笑うと、歩き

去っていく。

キョウ子の姿が、見えなくなると、幼児はようやく泣き止む。

母親「ほら、せっかく頂いたんだから、あの人のほうへお礼を言って」

幼児、母親と水風船を見つめているが、手を伸ばして受け取り、キョウ子のほうへ向かい、

幼児「怖い人、ありがと」

と、言う。

去っていく、キョウ子。

○酒場・外観（夜）

赤ちょうちんのぶら下がっている酒場。

昭和レトロな木造。

○同・中（夜）

吉田比呂（37）と、黒川啓（37）、小野翔（37）が、カウンターに並んで酒を飲んでいる。

啓と、翔は、すでにべろべろに酔っている。

啓「しかし、優子ちゃんは優しいな。ほんとうに優しい！」

翔「うん、ほんとに優しい」

啓「あの子が、三才歳まで、行き遅れてるなんて信じられないな」

比呂「そか？ 誰かいい人がいるって噂だぞ」

啓・翔「ほんとか？」

比呂「……」

比呂、黙って自分のグラスに酒のお代わりを注ぐ。

啓「それにしても、噂を聞いたか？」

翔「ああ」

啓「この間は、駅前で傘を貸したそうだ」

翔「その次は、商店街で子供に水風船を、な」

比呂「……」

比呂、酒をぐいっと飲みほしながら、聞いている。

啓「もっぱら噂だぜ。『向田さんの所の優子さ

んは、ホントに名前にたがわず優しい子だ』
って」

比呂「……だけど、それは、ほんとのことかな」

啓「は？」

翔は、酒を自分のグラスにどンドン注ぎながら、二人の話を聞いている。

比呂「ほんとに、優子ちゃんのやったことかな？みんな、勝手に名前の感じで勘違いしてるんじゃない？」

啓「決まってるだろう。優しい行いはみんな、優子ちゃんだ」

翔「そうだ。優しい顔、優しい名前、優子ちゃんだ」

うんうんと、首を振って酒をぐびーつと飲む。

比呂は、その横で、グラスを持ちながら、

比呂「僕は、キョウ子ちゃんが……」

啓「なんだ？比呂、やっぱりてめえは、キョ

ウ子が好きなのか？」

翔「あの、怖い顔をしたキョウウ子か？」

翔、べろべろに酔っぱらって、机に突っ伏す。

翔「キョウウ子のどこが、いいってんだよう……あんな。怖い顔の……。優子ちゃんは、かわいい。優子ちゃんは優しいに決まっている」

と、言っつて、翔、椅子から崩れ落ちてしまう。

比呂・啓「ああ……」

比呂、啓、椅子からずり落ちた翔を助け起こそうとする。

比呂、翔のほっぺたを叩きながら、

比呂「おい、翔、翔！」

啓「しようがねえなあ……」

と、言いつつ、啓もぐでんぐでんに酔っぱらって倒れる。

呆れて床に倒れている啓と翔を見る、
比呂。

ポケットから、ずっとスマホを取り出し、電話を掛ける。

比呂「あ、もしもし？キヨウ子ちゃん？まただよ。お願い」

床には、べろべろに酔っぱらった啓と翔が、横たわっている。

○走るキヨウ子の車の中・(夜)

キヨウ子が、ハンドルを握って車を走らせている。しようがないな、という表情。

その隣に、比呂。

後ろの席には、飲んだくれた啓と翔が折り重なって横たわっている。

比呂「すまないね、キヨウ子ちゃん」

キヨウ子「いいのよ、これくらい」

比呂「こいつら、いつも、飲んだくれて、酔いつぶれて、キヨウ子ちゃんが、送ってくれてるの、全然、知らないんだから」

キヨウ子、かすかに笑って、

キョウ子「だから、いいって」

比呂「でもって、いつも、キョウ子を一方的に悪者扱いだ」

キョウ子「（軽く微笑む）……」

車は、夜道を走っていく。

車窓から、流れる景色が見える。

比呂は、ふてくされ、口をへの字。

キョウ子「けど、この頃、優子とはどうなん？」

比呂、少しびっくりし、

比呂「あ、優子？」

キョウ子「あの子と、付き合ってるんやろ？」

比呂「……ああ」

比呂、暗い表情で、飲んだくれて伸びている啓と翔を見つめながら、車窓から外の景色を眺めている。

比呂「あの子はね……」

キョウ子「優子は、比呂にぞっこんや。結婚

してやりや」

比呂「……」

比呂は、ずっと外を眺めている。

キョウ子、じっと前を見て無表情で運
転している。

○海辺

夏の海辺。白いワンピースを着て、つ
ばひろの帽子を被った優子が、波打ち
際にはしゃいでいる。

比呂、その近くの浜で草むらに座り込
み、寂しそうに微笑んでいる。

近くにいる、2、3のカップルが、比
呂と優子を見て、噂している。

カップル女「見て、あの二人。美男美女」

カップル男「ああ、女の子は、優しそうだな」

カップル男は、鼻の下を伸ばして、優
子を見ている。

カップル女が、カップル男を肘で小突
く。

カップル男は、すまなさそうに、頭を
かく。

カップル男「それにしても、お似合いの二人

だ」

波が、浜辺に打ち上げる。

優子が、波打ち際から、浜で物思いに
ふけっっている比呂のほうを振り向いて、

優子「比呂さーん」

比呂は、気が付いて、優子のほうを振
り向く。

優子「比呂さん、また、ぼーっとして」

比呂、苦笑して、優子のほうへ手を振
る。

波打ち際から、優子、帰ってきて、

優子「もしかして、また、ねえちゃんのこと？」

比呂「……」

優子「どして？あんなん怖い顔と、このかわ
いい顔、どっちがいいん？」

と、不貞腐れる。

波が、ざざーんと打ち上げてくる。

○マンション・向田家・リビングダイニング

(夜)

テレビを見ながら、けらけら笑っているキョウ子。

キョウ子「あははは……」

テレビを指さしている。

恵子の声がキッチンからする。

恵子の声「キョウ子ー。ちよっと、用事をたのまれてくれない？」

キョウ子、テレビを見ながら、

キョウ子「なあにー？」

恵子の声「ちよっと、来て」

キョウ子、テレビを消して、キッチンへばたばたと、向かう。

○同・同・キッチン（夜）

シンクの前で、バッグのポケットをさがっている恵子。

キョウ子が、キッチンに入ってくる。

恵子「悪いけど、今月の生活費、おろしてきてくれない？」

恵子を見る、キョウ子。

キョウ子「ええ？こんな時間に？」

時計は、9時半。

キョウ子「仕方ないな」

と、苦笑して溜息。

○公営団地の前（夜）

団地の前へ、一階の部屋から佐々木一夫（50）が、こそそと、大きなボストンバッグを複数抱えて出てくる。

そのあとから、佐々木幸子（48）も、こそそと、玄関の戸を開けて出てくる。

一夫「誰も、いないな」

うなづく幸子。

一夫と幸子、周りをきよろきよろ。

○公営団地の近くに通っている道（夜）

団地のほうへ歩いてくるキョウ子。手には、銀行の袋を持っている。

○公営団地の前（夜）

一夫と、幸子、団地の近くに通りかかったキョウ子を見て、ぎよっとする。

一夫・幸子「ひっ!!」

キョウ子、(なんだ?)という表情をするが、通り過ぎようとする。

一夫「しゃ、借金取り!」

キョウ子、ちよつとムツとして、

キョウ子「ちがうわよ、私は、怖い顔だけど、

借金取りなんかじゃ……」

幸子「い、今、逃げようとしたところなんかじゃありません!」

と、幸子、おろおろして言う。

一夫「し、借金は、い、いずれ返しますから……」

キョウ子「あ、あなたたち、夜逃げね?」

一夫「ち、違います!」

キョウ子「ううん、隠さなくたっていいのよ」

一夫「……」

一夫、必死に首を横に振る。

キョウ子「だから、私は借金取りなんかじゃ

ないから」

まだ、一夫と幸子は、怯えている。

キヨウ子「……」

キヨウ子、呆れた様子で、一夫と幸子
を見ているが、

キヨウ子「どうしたんです？」

一夫「ひ、ひい！すみません、借金は、来月
耳を揃えて返します！だから、今回だけは、
……！」

幸子「すみません、田舎で、この人の母親が
急病なんです！」

一夫「（小声で）おい！もっとマシな言い訳し
ろよ」

幸子「（小声で）あんな、だって……」

キヨウ子、その様子を見て、溜息をつ
くが、手元の銀行の袋を見て、考え込
む。

一夫と、幸子、じーっと、びくびくし
ながら、キヨウ子のほうをうかがう。

キヨウ子「私は、借金取りじゃないわ」

一夫と、幸子、キョウ子を見ている。

キョウ子「けれど、毎日の生活に困るほど、お金にも困っていない。あなたたちは、夜逃げしなきゃならないほどなの？」

一夫と、幸子、激しく首を縦に振る。

一夫「もう、何日も食べていないんです。水道も、ガスも、何カ月も前から止められて」

幸子「親戚からも、見捨てられて、私たちは

……」

幸子、鼻をすすり始め、一夫に寄りかかり、顔を覆って泣き始める。

キョウ子、憐れそうに二人を見る。

一夫「うちでやっていた、小さな工場がつぶれて……」

幸子「社員が、金庫の中のわずかなお金まで、盗んで持って行ってしまったんです」

一夫「俺たちは、残った借金を、なんとか半分以上は返したんですが」

一夫も、泣き崩れる。

一夫「どうしても、少し残って、夜逃げする

しか……」

一夫、泣いて、ひざをつく。片腕で、涙をぬぐう。

キヨウ子、同情の目で、二人を見下ろしているが、手元の銀行の袋を見て、決心したようにうなづく。

キヨウ子「これ、持ってって」

一夫・幸子「？」

キヨウ子「ここに、少し、お金があるわ。少しの間なら、大丈夫でしょう？」

一夫「え？」

キヨウ子「これで、田舎のお母さんの所へ行って、これからのことを考えなさい。きつと、大丈夫よ」

一夫「え、そ、そんな」

キヨウ子、一夫と、幸子を見つめ、うなづく。

一夫と幸子、お互いを見つめ、キヨウ子と、差し出された銀行の袋を交互に見つめる。

幸子、おそるおそる銀行の袋を受け取る。

一夫と、幸子、振り向きもせず、そそくさと、そこから道路の向こうへ走り去る。

幸子と一夫、何度も振り返り、お辞儀をしながら。

それを見送って、キョウ子、大きく溜息をつく。

キョウ子「さて、また、ATMに帰るか」

キョウ子、きびすを返して、引き返す。

○マンション・向田家・リビングダイニング
(夜)

玄関側のリビングの入り口から、キョウ子が入ってくる。

キッチンの方から、皿を洗う音とともに恵子の声がある。

恵子の声「あら、キョウ子、遅かったわね」
キョウ子「うん、ここにお金置いておくから

ね」

と、銀行の袋をテーブルの上に置くと、
テレビをつけ、椅子に座る。

恵子の声「ありがとう。ねえ、まだ、優子が
帰ってこないのよ。知らない？」

キョウ子「ううん、知らない。また、比呂と
一緒じゃない？」

恵子の声「仕方ないわね、あの子も」

キョウ子「……」

恵子の声「あの子たち、結婚するのかしらね？」

キョウ子「……」

恵子の声「キョウ子も、好きだったんでしょ？」

比呂くんのこと」

キョウ子「……でも、比呂の気持ちもあるか
ら」

恵子の声「あら、比呂くんは、キョウ子のこ
とも、嫌いじゃないみたいだけど」

キョウ子「そ、そうかしら？」

恵子の声「よく、道で遭うと、『キョウ子ちゃ
ん、今日はどうしてますか？』とか、『キョ

ウ子ちゃんは、ほんと、優しい子ですよね』
って」

キヨウ子「……」

キヨウ子、無表情だが、苦笑し始め、
キヨウ子「比呂は、優しいのよ。私みたいの
が好かれるわけないやん」

と、言っ、て、椅子の背にもたれかかる。
キヨウ子、片手で、前髪をかきあげ、
溜息をふう、と 深くつく。物思いに
ふける。

○走る比呂の車の中（夜）

比呂、車を運転している。

うきうきと、助手席に優子が、カーラ
ジオの音楽にあわせて、踊っている。

優子、運転席の比呂のほうをちらちら
と、眺めながら、

優子「比呂さん、今日は、ありがとう」

うきうきと、踊り続ける優子。

比呂「いや、いいよ。これくらい。それより、

最近はどう？眠れなくなることは、なくな
った？」

優子「（明るく）うん！」

比呂「なら、いいけど」

優子「私は、かわいけんね。凶太い、ねえ
ちゃんとはちがって」

比呂「やめな、そんな言い方」

比呂は、不機嫌な顔をする。

優子、その顔を覗き込んで、

優子「ねえ、比呂さん」

比呂「うん？」

優子は、じーっと、運転する比呂を見
つめる。

と、突然、優子、比呂に抱き着き、車
がおおきく揺れ、カーブする。

比呂「わあ!!」

ハンドルを必死で操る比呂。

○道路（夜）

比呂と、優子の乗っている車が、カー

ブして、反対車線の路肩に乗り上げ、
反対車線から来たダンプカーが、慌て
てよけて止まり、窓から運転手が顔を
出し、大声で怒鳴る。

運転手「あぶねえだろ！気をつけろ！！」

車の中から、比呂が、ダンプカーのほ
うへお辞儀をする。

優子は素知らぬ顔。

ダンプカーの運転手は、

運転手「ちっ！」

と、言って窓を閉め、去っていく。

○比呂の車の中（夜）

比呂、去っていくダンプカーを見つめ
ているが、優子が、腕を絡めてくる。

優子「比呂くん」

比呂「おい、やめろよ」

比呂、優子の手を振りほどく。

優子、残念そうに比呂を見つめる。

比呂、再び車を発車させる。

○公園

大丸大介（たむ）が、水道の近くのベンチに座っている。

うなだれて、疲れた様子。

大丸「……」

ぼけーっと、宙を見つめている。

子供 A、B、C が、寄ってきて、

子供 A 「あ、あのおじちゃん、会社、リストラされたんと、違うか？」

子供 B 「へへ……」

子供 A、B、C は、興味深げに、大丸をじろじろ見る。

うなずき合い、大丸に、そろりそろりと、ちよつとずつ近づいていく。

大丸は、うつむいているが、突然、水が飛んできて、大丸にかかる。

子供たちが、ホースで大丸に向かって、水を放射している。

大丸「う、うわっ！」

と、言って、跳びあがる。

大丸「な、なにすんねん！」

大丸が、喚声を上げて逃げる子供たちを追いかけていく。

公園の入り口に、キョウ子が通りかかる。

道路から、公園のなかの大丸と子供たちの鬭争に、気が付く。

首を伸ばして、子供たちと大丸が追い駆けっこしているのを見る。

大丸は、逃げる子供たちを追って公園からいなくなる。

あとのベンチに大丸が残したカバン。キョウ子は、カバンに気が付いて近寄

り、カバンを抱えて大丸と子供が去ったほうを眺める。

しかし、大丸は、遠く駆け去りそのまま帰ってこない。

ベンチのキョウ子の前で、三輪車に乗った女の子が、くるくる回って去って

いく。

カバンを抱えたまま、キョウ子は、水の出たままの水道の蛇口を閉める。

振り返って待っても大丸は現れない。

キョウ子「……」

キョウ子、カバンを見つめ、困った顔をして溜息をつく。

ひまわりの花壇の上空をカラスが鳴きながら飛んでいく。

○交番・外観

○同・中

キョウ子がお巡りさんに事情聴取されている。

キョウ子「そう、このカバン、公園で……」
と、机に置かれたカバンを指さして困り顔でいると、大丸が、駆け込んでくる。汗だくで、ハンカチで汗を拭き拭き、

大丸「お、お巡りさん！」

キヨウ子「あ！」

大丸、机の上に置いてあるカバンに気が付くと、

大丸「あ、俺のカバン！」

大丸は、慌てて机の上のカバンを奪取し、抱え込み、ほおずりし、中身を、がさがさと確認する。

大丸「ああ、よかったあ！」

横で、呆気にとられているキヨウ子を見つけると、

大丸「あ、あんたが取ったんか!？」

キヨウ子・お巡りさん「はあ!？」

大丸「あんたが、取ったんか? ごつつい顔しとるなあ! あんた、悪い行いが、顔に出とるよ！」

と、キヨウ子につかみかかる。

キヨウ子「はあ!?! あたしは……」

と、キヨウ子も応戦するが、

お巡りさん「まあまあまあ、まさか、盗んだ

犯人が、警察へ持ってくるわけないじゃないですか。この人は、わざわざ、あなたのカバンを届けに来たんですよ？」

と、間に割って入る。

大丸「はあ？ほんまでっか、そりゃ、ほんまに失礼しました。ありがとやんす」

と、大丸、キヨウ子に向かってぺこぺこする。

キヨウ子、恐縮して、両手を顔の前で手を振る。

大丸「このカバンなか、今日の会議の資料が入ってたんですよ。も、ややこしい会議で、これがないと……」

お巡りさん「ああ、ああ、ああ、わかった。

あなた、この人に礼を言い！」

と、キヨウ子のほうへ指を指し、礼を促す。

大丸「ああ、あんさん、とんでもないことしてくれました。あんさん、お名前は？」

と、大丸ぺこぺこ。

キョウ子「あ、向田です」

大丸「あ、向田さん。この礼は、必ず……」

と、そこで、大丸のスマホの着信音が鳴る。

大丸「はい、はいー!? へ!? もう、始まっているんですか!？」

大丸、腕時計を確認する。

大丸「あ、ああー!! もう、こんな時間や!!」

と、どたばたと、交番を出ていく。

お巡りさん「ああー! あんた、一応、拾得物届けに……」

と、交番から首を出して、声を張り上

げるが、大丸は、人混みに紛れてもう、

見えない。

お巡りさん「なんや? あれ?」

お巡りさん、キョウ子と、顔を見合わせる、お互いに肩をすくめる。

○向田家のあるマンション・外観

○マンション・向田家・玄関前（夕）

玄関先、開けかけたドアの中から大丸の手を振りほどこうと、恵子が、大丸ともめている。

大丸「ほんまやねん、ほんま。わしゃ、優子さんに用があんねん」

恵子「だから、優子は、今、いません！」

大丸「わしゃ、優子さんに、ほんまにお世話になってん。お礼がしたいん！」

恵子「とにかく、困りますから、帰ってください！」

恵子、くんずほぐれつするが、大丸の手を振り払い、戸を閉める。

ほっと一息つき、恵子。

恵子「なんなん？あれ？」

と、一言いい、胸をなでおろす。

○同・共用部分・廊下（夕）

大丸、くさくさしながら、マンションの廊下を歩いてくる。

大丸の向こう側から優子が歩いてきて、
大丸とすれ違う。

すれ違いざま、優子と肩がぶつかり、
大丸「なんやねん！あんた！」

と、ぶつくさ文句を言って去っていく。

優子も、怪訝そうな顔で、大丸を見つ
め、

優子「なんや、あのおっさん！」

と、吐き捨て、家のほうへ歩いていく。

○同・外観（夕）

マンションの前の公園で、犬を散歩さ
せている住人がうろうろしている。

大丸が、くさくさしながら、歩いてい
く。

大丸「なんやねん、もうー！」

散歩している犬は、息をはあはあさせ
ている。

ジー、ジー、と虫の声。

○同・向田家・リビングダイニング（夜）

キョウ子、優子、恵子が、食事をして
いる。

テレビがついていて、お笑い番組が、
流れている。

キョウ子、それを眺めているが、芸人
たちが、ふざけるのと一緒に笑う。

三人で、ぱくぱくと、夕食を食べなが
ら、

恵子「……なんか、変なのよ。最近」

優子「は？」

恵子「最近、あちこち歩いても、よく声をか
けられるの。あなたんところの優子さん、

ほんと感心ね、って」

優子「なんじゃ？それ」

キョウ子「優子、あんだ、なんか褒められる
ようなことしたん？」

優子「うんにゃ」

恵子「なんか、優子の評判いいわよ？優しい
ね、って」

優子「はあ？」

キョウ子、かまわず食べ続ける。

優子「何を、根拠に？」

優子、少々、苦笑気味に言う。

キョウ子「優子、あんたも、なんか、いい行いをしたんか？」

優子「はは、世の中も、このあたしの心までの美しさに目覚めたのかもね」

キョウ子「なにゆうてん」

キョウ子、笑って軽く優子に肘つきする。

恵子「今日もね」

キョウ子、優子は、恵子のほうを見る。

恵子「サラリーマンっぽい人が来て、『優子さんに、お礼がしたい』って」

優子「はあ？」

恵子「この間、その公園で、カバンを拾って届けてもらったんだって」

キョウ子「ふーん……」

優子「なにそれ」

キョウ子、優子、また、ぱくぱくと夕食を食べながら、

優子「また、私へのストーカーか、なにかと、
ちゃう？」

恵子「サラリーマンで、公園で子供にからかわれて、追いかけたら……」

キョウ子「ああ、そのおっさん、この間、あたしが、交番に忘れ物届けてやってん。なんでも、会議に使うとかで、えらい大事なうに持ってたわ」

恵子・優子「ふうん」

恵子「また、キョウ子が、何かしたのを、優子がやった、と勘違いされたのね」
と、溜息をつく。

キョウ子「……」

優子「まったく、世間の人なんて、ちよろいもんや。皆、この顔に騙される」

優子が、嬉しそうに笑う。

キョウ子、それを見て、何とも言えない、悲しいような悔しいような顔をし

て、

キョウ子「…あたしも、あんたみたいで、優しい名前に生まれればよかったわ」

と、ご飯を掻き込みながら、

キョウ子「この恐ろしい顔と、怖い名前で、

あたし、随分、損してる…」

キョウ子は、ふと、食事の手を止めて
しまう。

テレビのお笑い芸人たちが、わっと笑
い声を上げる。

○同・同・キョウ子の部屋・(夜)

キョウ子が、ドレッサーの前で、鏡を
覗き込みながら、溜息をついている。

○海辺

海辺の草むらに座って、比呂と、優子
が話している。

比呂は、浮かない顔。

優子は、うきうきしている。

優子「ねえ、比呂さん、それで、さあ……」

比呂「よく、自分が勘違いされたことで、そんなに嬉々として話せるね」

優子「だって、嬉しいじゃない？ひとに優しく思われて」

比呂「だって、それ、キョウ子ちゃんのことじゃない？」

優子「だって、それが、皆の見た印象よ？」

比呂「……」

比呂、その辺に転がっていた石を海に向かって、こしゃくそうに投げる。

優子「皆、私のこの顔が好きねん。いいやん？」

人気者の私と付き合えて」

比呂「付き合ってるのか？俺たち」

優子「そうよ？みんな、そう思うてん」

比呂は、小石を投げ続ける。

優子「比呂くんは、野球観戦に誘っても、ドライブに連れてって、って、言っても連れてってくれるやん」

比呂「それは、幼馴染だからな」

優子「そう？」

比呂の顔を覗き込む。

優子「おねえちゃんが、ほんとは、好きなんとちゃう？」

比呂、びっくりした顔して、優子の顔を見返すが、また、小石を拾って海にぽんぽん投げ続ける。

優子「やっぱり……」

比呂「アホなこと、言わんで」

優子「隠したって、わかるわ」

比呂「……」

優子「……ねえ、あんな怖い顔したねえちゃん、どっちが好きねん？」

比呂「……そんなこと言う、優子ちゃんは……嫌いだ」

そのまま、すっくと立ち上がって、比呂その場から離れる。

優子「あ、比呂くん」

取り残される優子。

じーっと、海岸線を立ち去る比呂のほ

うを見ているが、比呂は、引き返して
くる気配がない。

そのまま、比呂は、波打ち際を波に沿
って歩き続けていく。

優子、悔しそうに比呂を見つめている
が、海のほうを見つめる。

履いていたサンダルを脱ぎ、海にふら
ふらと向かう優子。

そのまま、海へと入っていく。
どンドン、沖に向かって、海へと入っ

ていく優子。

○病院・入口（夕）

あわてて車から降り、病院へ入ってい
くキョウ子。

○同・病室（夕）

個室の病室で、優子が、点滴を受けて
眠っている。

口には、呼吸器。

キョウ子「どしたん!? 優子!!」

近くには、恵子と、比呂がいる。

キョウ子、優子にすがり付き、

キョウ子「どしたん? 今日は、比呂と一緒に
デートやなかったん?」

比呂「……」

恵子「比呂さん、これ、どういうこと?」

比呂「……」

キョウ子「優子!」

キョウ子、比呂につかみかかり、

キョウ子「優子に、なにをしたん!」

キョウ子が、掴みかかったところで、

優子が、目を覚ます。

優子、なにか、しゃべろうとして、宙
に手を伸ばす。

優子は、呼吸器を外して、しゃべりだ
す。

優子「比呂さん……、優子……比呂さんが、

……優子をお嫁にもらって……」

キョウ子、恵子、顔を見合す。

キョウ子、恵子が、比呂を見返す。

比呂、困った表情。

比呂「優子ちゃん、俺は……」

優子、悲しそうな顔。

比呂「……」

比呂の、切羽詰まった青ざめた表情。

○公園

蝉は、ツクツクホウシが鳴いている。

花壇のひまわりは、ほとんどが枯れている。

○マンション・向田家・優子の部屋

優子、扇風機を回した部屋で、ベッドに横たわっている。

窓は、開いていて、カーテンが揺れている。

風鈴が、チリーンと鳴る。

薄目を開けて、物憂げな表情の優子。
キョウ子が、麦茶のグラスとポット、

リンゴを盆にのせて持って入ってくる。

優子、キョウ子が入ってくるのを見ると、

優子「ねえちゃん、入るときはノックして
って言ってるやん！」

キョウ子「ごめん、ごめん」

扇風機がぱらぱらと回っている。

キョウ子、優子の隣で麦茶をグラスに
注ぎ始める。

優子「それにしても、あれから、比呂くんか
ら、連絡、来いへんな？」

キョウ子、注いだ麦茶のグラスを優子
の枕元の机に置く。

風鈴がチリーンと鳴る。

キョウ子が、優子の隣でリンゴをむい
ている。

優子、寂しそうに言う。

優子「結局、比呂くんも、他の男と同じなの
よ。わたしの化粧品買う量と、ヒステリー
に圧倒されて、結婚せえへんのやわ」

キョウ子、力なく笑う。

キョウ子「あんたも、もう、そろそろ、お化粧とかに凝りすぎるのやめて、料理の腕のひとつでも、磨きい。穏やかになりい」

優子「いやや、おねえちゃんみたいに行き遅れるのはいやや」

キョウ子「優子……」

キョウ子、困り果てた顔をする。

机の上のスマホの、着信音がする。

スマホを取り上げ、優子、

優子「比呂くんからや」

スクロールし、スマホの内容を確認。

優子「LINE……」

優子、驚愕の表情になる。

キョウ子に、スマホの画面を向ける。

スマホ画面に、

(優子、結婚しよう)

キョウ子、びっくりして青ざめる。

キョウ子「……」

チリーンという風鈴の音。

扇風機のばらばらと、回る音。
揺れるカーテン。

○マンション・向田家・リビングダイニング・

(夜)

T・数日後

恵子が、対面式キッチンと、リビングダイニングの間を忙しく行ったり来たりしている。手には、料理の入った皿や、箸。

キョウ子も、やってきて、その準備に加わる。

恵子「急いで！キョウ子！比呂さん、来ちゃ
うわよ」

キョウ子「母さん、普段から掃除しないんだ
もん」

恵子「だって、この夏の暑いのに、こんな話
が舞い込むなんて！」

そこに、優子が、化粧パフをぱたぱた
させながら、部屋に入ってくる。

優子「ああー！こんな、晴れの日に！お化粧のノリが悪いわ！」

恵子「こんな日に、おとさんがいたら、どんなに喜ぶか……」

リビングの片隅に棚が置いてあり、行男の微笑む写真が飾られている。

恵子「おとさんも、自分の娘が、結婚の申し込みされるところ、見たかっただろうにね」

優子、笑いながら、

優子「まだ、嫁に行くと決まったわけではないわ」

キョウ子「けど、正式にご挨拶なんですよ？」

恵子「比呂さんは、優子が好きだったのね」

キョウ子、支度の手を止めて、暗い顔をする。

キョウ子「……」

恵子、優子は、それに気づかず、嬉々として部屋そあちこち行き来し用意を進める。

○同・(夜)

食卓の周りを、キョウ子、優子、恵子、比呂が、囲んでいる。

リビングの片隅の棚で、行男が微笑んでいる遺影。

キョウ子・優子・恵子・比呂「……」

時計のチクタクいう音だけが響く。

キョウ子、おそるおそる、

キョウ子「ねえ、比呂、なにか言ったら？」

促されて、比呂、意を決したように、

比呂「……恵子さんを僕にください」

キョウ子、恵子、優子「は!？」

比呂「あ、間違えた」

比呂、改めて、居住まいを正し、

比呂「恵子さん、優子さんを僕にください！」

キョウ子、優子、恵子、お互いに顔を

見合わせる。

恵子「うちの子をよろしくお願いいたします」

恵子、お辞儀をする。

○海岸の断崖絶壁

断崖絶壁の上で、キョウ子が一人佇んでいる。

絶壁の下では、波が、ざぶーん、ざぶーん。

キョウ子、波の打ち付ける絶壁の際へと、歩み進んでいく。

じわり、じわり……。

キョウ子「だめや……、結局、だめなんや」

波が、ざぶーん、ざぶーん。

キョウ子「いくら、優しくしたって、人は、私を優しく見てなんかくれないんや！」

波が、ざぶーん、ざぶーん。

キョウ子「どうしたって、人は、優子のほうが優しいと見るの！」

波が、激しい。

キョウ子「私が、いくら 優しくしたって、

本当に優しくしたって、報われないのよ！」

波が、打ちつける。

キョウ子「結局、人は、見かけなんだから」

!!
」

波が、断崖絶壁の下に激しく打ちつける。

キヨウ子は、波をかぶって、怯む。

絶壁の上で、膝をついて、くずおれる

キヨウ子。

嗚咽が、止まらない。

比呂の声が、後ろからする。

比呂「キヨウ子ちゃん」

キヨウ子、びっくりして、後ろを振り返る。

比呂が、断崖絶壁をキヨウ子のほうへ

向かって歩いてくる。

キヨウ子は、目をまんまるにしている。

比呂「キヨウ子ちゃん、ここにいたのか」

キヨウ子「ひ、比呂くん……」

比呂「みんな、いなくなっちゃって、探してる

よ？」

キヨウ子「……もう、いいんや。いいんや」

比呂「……」

比呂、キョウ子が、座り込んでへたり
込んでいる隣に座る。

比呂「キョウ子ちゃん……」

波が、ざあざあ、いつている。

比呂「……キョウ子ちゃん、俺が好きやった
ん……？」

キョウ子、じつと下を向いて比呂の言
うことに耳を傾けている。

比呂「俺も……やさしいキョウ子ちゃんが、
……けど……な……」

比呂、その場の砂をつかんでぎゅうつ
と握る。悔しそうに、

比呂「……ごめんな……」

キョウ子、泣きながら、

キョウ子「いいんや、いいんや……」

キョウ子、わんわんと泣く。

○商店街

にぎわう人の中、大丸が、うろうろと、
人探し顔。

大丸「おらん、おらんわ」

前へ、後ろへときよろきよろとしてい
る。

大丸「おらん、おらん、どこ探しても、俺の
命の恩人！」

ちよこちよこと、周りを見渡したあと、
通行人の老婆に話しかける。

大丸「あんなあ、お婆ちゃん、向田さんここ
のええ娘さん知つとるか？ 優子さんてらし
いんだけど、ほんまに名前にたがわず、優
しいひとや」

老婆、ただうなずいている。

大丸「おれ、さがしとんけど、知らんか？」
老婆、ううん、と首を横に振る。

○結婚式場教会・外観

大勢の人が、優子と比呂を囲んで、結
婚式を祝っている。啓と翔が、腕で涙
をぬぐって泣いている。

啓・翔「俺らの優子ちゃんがー!!」

会場に、盛装したキョウ子が、切なさ
そうな表情で小さな花束を持っている。
じっと、諦めたような顔で離れたとこ
ろから比呂と優子を見ている。

恵子が、キョウ子の横で、比呂と優子
に向かって手を振る。

恵子「優子ー、比呂さん！おめでとうー！！」
その横で、

啓・翔「くそー！比呂、おれらの優子ちゃん
を取りやがってー！！」

その場到大勢が、優子と、比呂に向か
って「おめでとう」と、叫ぶ。

キョウ子は、叫ぶのをためらっている
が人混みをかき分けて、二人のほうへ
進む。

そつと、優子に小さな花束を渡して、
震える声でいう。

キョウ子「……おめでとう」

比呂、ためらっているが小さく笑う。
優子、満面の笑顔で、花束を受け取る。

優子「ありがとう、お姉ちゃん」

キョウ子、深くうなづく。

会場は、わっと湧く。

教会の鐘が鳴る。

○走るバスの中（夜）

車窓にもたれかかって、普段着のキョウ子は、ぼうつとうつろな顔で、流れる景色を眺めている。

○住宅街

電信柱の下で、子犬が捨てられていて、段ボールに入り、鳴いている。
キョウ子が、そこへ、通りかかる。
しかし、一瞥すると、無視して去っていく。

○住宅街の道路

子供A、B、Cが、たわむれながら走っていく。

子供たちの反対方向から、キョウ子が、
下を向いて、もくもくと歩いてくる。
子供Aが、転んで倒れる。
キョウ子は、無視して歩いていく。
キョウ子を見送る子供たち。

○マンション・向田家・キョウ子の部屋（夜）

キョウ子、魔女の服装をして、中央に
しつらえた机に向かっている。

机には黒い布がかけてあり、その上に
水晶玉が載っている。

水晶玉の近くには、火の点いた卓上ガ
スコンロに鍋がかけてあり、もくもく
と煙が上がっている。

その横に、トカゲの尻尾や蝙蝠の羽根。

キョウ子、分厚い本を読みながら、

キョウ子「黒魔術は、嫌やけど、白魔術はど
うかな？これくらいなら……」

キョウ子、本を読みながら、

キョウ子「ええと、次はトカゲの尻尾……」

と、トカゲのしっぽを取り出す。

それを鍋に放り投げ、鍋からは、ジュツと音がして、水蒸気が立ち上がる。

キヨウ子「んで……、蝙蝠の羽根」

と、蝙蝠の羽根を取り出す。

キヨウ子「なむなむなむ……あたしを、美人にしてください」

と、唱え、蝙蝠の羽根を鍋に放り込むと、ボンツと行って、煙がもうもうと上がる。

煙が収まったところに、キヨウ子、相変わらず元の怖い顔。

キヨウ子、手鏡を見つめるが、顔が変わっていないのを確認し、

キヨウ子「……だめかな」

キヨウ子、手鏡をみつめ、髪形が崩れて残念そうな顔。

○マンション・向田家・リビングダイニング

恵子が、ぱたぱたと、キッチンのほう

から、麦茶のグラスを四つ、お盆に持って、テーブルに着く。

比呂と優子が座っている。

キョウ子、離れたソファで、だらりと斜めに座っている。

恵子「まあまあまあ、比呂さん、どうだった？

新婚旅行は？」

比呂、はにかみながら、

比呂「まあ……」

優子も、はにかんでいる。

キョウ子、交互に比呂と優子を見ながら、つまらなそうな顔。

キョウ子「……」

恵子「まったく、お似合いね。おとさんも、

これを見たら、きっと喜ぶわ」

キョウ子は、明後日の方向を向く。

部屋の片隅に、行男の遺影。

窓辺に、風鈴がチリーン。

○住宅街（夕）

前にキョウ子が、見捨てた子犬が、まだ、段ボール箱に入ってぶるぶるしている。小さく、くうーん、と鳴く。

○ 駅の前（朝）

灼熱の太陽がビルの陰から昇ってくる。道には陽炎。

○ 走る電車の中（朝）

キョウ子が、走る満員の通勤電車のなかで、車窓から外を眺めている。

連結部分の近くのドアの所に、キョウ子は、立っている。

少し、息が荒くなり気味、汗がすごい。すぐ近くに、優先席、その先に連結部分。隣の車両から、内川花子（36）が入ってくる。

乗客 A 「きゃあ！」

キョウ子が、振り向くと、連結部分で花子が倒れている。ぐったりと、その

まま動かない。

キョウ子「……あ」

キョウ子、傍観しているが、乗客たちは、騒ぎ始め、花子の周りに輪を作る。

乗客 A 「大丈夫ですか？」

花子、ぼーっとしていて、連結部分から動かない。

花子の片足が、連結部分のつなぎの鉄板からはみ出している。

キョウ子「……」

キョウ子、乗客の山の切れ目から横目で見ている。

乗客 A 「大丈夫ですか？ここから、離れんと、危ないですよ？」

花子「い、いえ……わたし、……ここで……」

キョウ子、ハンカチで汗をぬぐう。

キョウ子「……」

キョウ子、この騒動を傍観して無視しようとしている。

乗客 A 「しかし……」

花子「いえ、私、脚が悪いので……」

キョウ子「……」

やはり、キョウ子、無視しようとして、
あまりこの光景を見ない。

電車が、揺れて、連結部分が軋む。

乗客 A「きゃあ！」

と、青ざめる。

キョウ子「……」

電車は、ひたすら走って行く。

車窓から、景色が流れる。

車両の乗客たちは、ただ、黙って花子
のほうを心配そうに見ている。

息が苦しそうな花子。

ただ、顔を見かわし、見ているだけの
乗客たち。

キョウ子、決心したように一人うなず
く。

キョウ子、ふらふらしながら、花子と
乗客 A のほうへ近寄っていく。

キョウ子は、自分の汗をハンカチで拭

き拭き、

キョウ子「…大丈夫ですか？」

花子、焦点の半ば定まらない視線でこたえる。

花子「ひっ、怖い顔」

キョウ子「動きましよう？」

花子「あ…私、脚が悪いんで…」

電車が、カーブする。

連結部分が軋む。

乗客たち、花子の鉄板からはみ出した足のほうを見て、悲鳴を上げる。

キョウ子・乗客A「あぶない！」

キョウ子、青ざめ、乗客Aと顔を見合わせる。

キョウ子「と、とにかく、ここから動かさない…」

花子「い、いえ」

乗客A「非常ボタン、押しますか？」

キョウ子、非常ボタンのほうを見つめ、そして、腕時計を見つめる。

時刻は、8時08分。

見渡すと、通勤途中のサラリーマンが時間を気にしている。

キョウ子「……いえ」

キョウ子、笑顔を作り、やさしく花子のほうを見つめ、

キョウ子「ね、ここから、動きましょ？」

と、微笑みかける。

立ち尽くすキョウ子。

(O・L) 女神のように美しい優しいそんな女性が立っている。

花子、美しい女性を見上げる。

キョウ子、花子を抱え、連結部分からじりじりと助け出し、優先席に座らせる。

乗客たちから拍手。

電車が、ガタンゴトン轟音を立てて走っていく。

○ 駅 (朝)

キョウ子が、花子を肩で抱えて駅のホームに降り立つ。
乗客たちから、拍手。
ほっとするが、突然、キョウ子はふらふらと倒れる。

○川上病院前（朝）

救急車が、サイレンを鳴らし、病院に乗り付ける。
ばらばらと、救急車から救急隊員が出てくる。

救急隊員は、キョウ子をストックチャ―に載せ、病院へ運び込む。

○大きな交差点

交差点で、大丸が、右往左往しながら、
大丸「優子さーん、優子さんはおらんけー」
と、探している。

首を長く伸ばしながら、

大丸「おらんやーん」

と、嘆き悲しむ。

と、交差点の大きなオーロラビジョンに、ニュース画面が映る。

キャスター「今朝、阪急電鉄、押田駅付近で走っていた電車の連結部分で、乗客が倒れ、……」

大丸は、何気なくオーロラビジョンを眺める。

キャスター「乗っていた向田キョウ子さん、37歳が、この乗客を助け、通勤途中の電車が緊急停止を免れました。このため、約10万人の朝の通勤ラッシュに支障はなく、阪急電鉄では……」

キョウ子の写真がオーロラビジョンに映し出される。

大丸「優子さん……キョウ子さんて、名前やったんや……」

周りの通行人たちもオーロラビジョンを見つめる。その中に、一夫、幸子もいる。

一夫「あ、あの人は、私にお金を貸してくれ
た人や」

幸子「あ、命の恩人……！」

近くを通りかかったベビーカーの母子
が、

幼児「あ、水風船くれた、怖い顔！」

母親も、見上げる。

そのまた、近くにいた老婆も、

老婆「あ、傘を貸してくれた……」

大丸、一夫、幸子、母子、老婆、オー
ロラビジョンを見つめる、群衆で、あ
ちこちの人が、

群衆 A 「あ、あの人は……」

群衆 B 「わ、わたしに……」

群衆 C 「怖いけど！優しい人……！」

交差点は、大騒ぎになる。

キャスター「阪急電鉄では、キョウ子さんに
感謝状をだし、感謝の意を伝える意向です。
しかし、キョウ子さんは、その後、熱中症
で倒れ……」

大丸「なぬー!?熱中症で、倒れたんやおー
!？」

と、雄たけびを上げる。

○川上病院・キョウ子の病室

キョウ子が、人工呼吸マスクをしながら、虫の息。

比呂、優子、恵子が心配そうにキョウ子
を覗き込んでいる。

キョウ子、静かに呼吸している。

近くに、医師と、看護婦B。

恵子「せ、先生……」

優子「ねえちゃん……」

比呂「……」

比呂、真っ青な顔。

医師「熱中症です。それも、とても重篤です。

もう、駄目かもしれませぬ。覚悟してくだ

さい」

恵子「そんな、おとさんと、おんなじじやな

いですか……」

優子「おとやんが、呼んでるのかしら……」

恵子、優子、比呂、表情が青ざめる。

キョウ子を揺すり、恵子、

恵子「まだ、はやい、まだ早いわ。あんたみ

たいなええ子が、おとやんとこ、まだ早い。

気をしっかり持ち」

優子「おとやん、連れてかないで」

優子、泣く。

比呂、後ろのほうで小さく、

比呂「キョウ子、……」

と、言っ、うつむき、こぶしを握り
締める。

血圧や心拍数の機械が、どんだん数の
表示をまばらにしていく。

バイタルのアラーム音が鳴る。

恵子「キョウ子！」

ばたばたと、廊下から足音がする。

足音が近づいてくる。

ドアをばんっと開けて、啓と翔が入っ
てくる。

おろろとする、看護婦 B。

啓・翔「おい！キョウ子は!?」

比呂「啓、翔……」

比呂は、啓と翔のほうを振り向いて、首を横に振る。

啓と翔、呆然。

優子「ねえちゃん！」

優子、キョウ子に縋り付く。

鳴り続けるアラーム。

啓・翔「キョウ子……！」

わらわらと、キョウ子に近寄る。

啓「お前、本当はやさしい子やったんやな、テレビ見たで。電車で倒れた人、助けったたんやな」

看護婦 B、それを制して、

看護婦 B「落ち着いてください！静かにして！」

啓「これが、静かにしてられるかい！」

翔「キョウ子ーっ」

比呂、横目で啓と、翔を見る。

優子、キョウ子に縋り付いて泣いている。

比呂「……」

鳴り続けるアラーム。

比呂、にわかになわなと震え始める。

比呂「キョウ子、これじゃ、報われんで！」

優子「わーっ」

と、泣く。

キョウ子、意識を失ったまま、しずかな呼吸を続ける。

部屋にキョウ子の呼吸音が続く。

アラームは続く。

比呂「……」

部屋に泣く声が満ち始める。

恵子も、優子も、啓も翔も、比呂も泣く。

医師「ご家族のかた、覚悟してください……」

恵子「キョウ子、お前みたいなの優しい子が、
なんで、こんな終わり方するん？」

優子も、恵子も、すすり泣く。

ふと、キョウ子が、かすかに目を開ける。

いったん、アラームは落ち着く。

震える手で、恵子や優子のほうに手を伸ばそうとするが、手は、宙をふらふらとする。

キョウ子「あたし、結局……」

恵子「キョウ子……！」

優子が、ヒステリックに泣き始める。

比呂、優子をなだめようと必死。

比呂「優子！」

キョウ子「……あたし、これで、死ぬんやな？」

これで、……あまり、報われない人生やっ
た……」

呆然とする一同。

一同「……」

キョウ子「あたし、結局、怖い顔やってん、

誰からも、誰からも……」

再び、けたたましく鳴るアラーム。

看護婦 B 「先生！」

優子が、絶叫する。

優子「……こんなん、こんなん、あんまりや
ー!!」

その声が、病院中にこだまする。

沈黙。

アラーム音。

遠く病院の廊下からかすかに人が走っ
てくる音がする。

ばたばたと、どンドン大きく、近づい
て来る足音。

ばんっ、と、また扉が開く。

看護婦C「先生！向田さん！」

医師「なんだ？」

医師が、振り返る。ほかの者は、すす
り泣いている。

アラーム音は続く。

看護婦C「そとが、そとが、大変なことにな
ってます！」

医師「なんだ？」

キョウウ子のうつろな顔にひとすじの涙

が流れる。

○同・入口前

大勢の人が詰めかけている。
お互い押し合いへし合いして、なんとか病院に押しかけようとしている。
その中に、一夫、幸子、キヨウ子が水風船をあげた母子、キヨウ子が傘を貸した老婆、大丸も居る。

群衆たち「キヨウ子さんに会わせろー!! キヨウ子さんに会わせろー!!」

声は、シュプレヒコールになっている。
看護婦たちや、病院事務員などの医療スタッフたちが、必死になって、群衆を止めている。

○同・キヨウ子の病室

キヨウ子の病室にも、病院前の騒動の
声が聞こえる。

うつろな表情でキヨウ子、外の様子を

聞いている。

キヨウ子「……なんやねん。なにが、起こってん？」

うつろな表情で涙を流す。

恵子、優子、比呂、啓、翔、医師、看護婦 B、C も、群衆のシュプレヒコールを聞いて、おろおろしている。

○同・入口前

群衆たちが、押し合いへし合いしながら、口々に、

群衆たち「キヨウ子さんに、会わせろー！キ

ヨウ子さんに会わせろー！」

群衆 A「俺たちは、キヨウ子さんに、恩があるけーん！やさしくしてもらたん！！」

群衆 B「礼が言いたいんやー！会わせてくれー！！」

群衆 C「あんな、いい人おらんー！！」

事務員「ここは、病院ですから、落ち着いてください！！」

看護婦 D 「皆さん、落ち着いて!!」

群衆が、病院に押しかけそうになって
いるのを医療スタッフたちは必死に止
めている。

○同・キョウ子の病室

キョウ子が、うつろな目で、暴動の声
を聞いている。

キョウ子「……」

キョウ子の目に涙があふれる。

○同・入口前

暴動は、ますます、もみあい、へしあ
いの動きが活発になる。

一夫「俺は、キョウ子さんに、命、助けても
ろたんやー!!会社つぶれて、野垂れ死にす
るところ、助けてもろたんやー!!」

老婆「私も、傘、貸してもろうた!」

幼児「怖い顔やけど、水風船もろうたー!」

群衆は、ごたごたと、押し合いへしあ

いしている。

○同・キヨウ子の病室

キヨウ子、うつろな表情で、シュプレ
ヒコールを聞いている。

キヨウ子「……」

キヨウ子、とめどなく涙があふれ、ぶ
るぶると、体を震えわせ、唇を噛みし
める。

○同・入口前

群衆のざわめきが大きくなる。

群衆A「キヨウ子さんに、会わせてー!!」

大丸、押し合いへしあいの、この様子
を見回して、

大丸「……すごいことになってん」

再び、見回して、

大丸「俺は、大事な書類、届けてもろて、会
議成功してんー!!」

と、両手を口にあてて病院に向かって

大声で叫ぶ。

群衆たち「会わせてくれー！会わせてくれー

!!」

看護婦D「みなさん、落ち着いて！ここは、病院です！」

病院前は、群衆のボルテージが上がっている。皆、押し合いへし合い。

○警察前

パトカーが、何台も出動しようとしている。

警察無線の声「川上病院前で、暴動が起きてます！川上病院前で、暴動が起きてます！緊急出動！」

パトカーたちが、サイレンを鳴らし出動していく。

○テレビ画面

テレビのアナウンサーが、必死の形相で、アナウンスしている。

アナウンサー「今日、正午近く、大阪府南区の川上病院前で、大勢の人が押しかけ、たいへんな騒動となっております。というのも、熱中症で入院している、向田キョウ子さんに恩を受けたという人たちが、大暴動をおこし、『キョウ子さんに、会わせろ』と、口々に……」

アナウンサーも、びっくりした表情で続ける。

画面に、キョウ子の顔写真が大写して映る。

○お茶の間・Aの家

お茶の間で憩っていたAと、Aの家族A1と、A2が、キョウ子のニュースの画面を見ている。
キョウ子の写真が映る。

A「あ！この人や！この人に親切にしてもろた！」

Aの家族A1とA2は、びっくりして、

テレビ画面に注目する。

○お茶の間 B

お茶の間 B でも、テレビを見ていた B が、

B 「あ、この人だ！」

○大衆食堂

ごった返す食堂の中で、テレビ画面にキョウ子の写真が映る。

C 1 が指さす。C 2、C 3 も同様。

C 1 「この人！」

C 1、C 2、C 3 が、びっくりして、食堂から飛び出す。

店の主人が追い掛ける。

店の主人 「おい！お勘定！」

○川上病院・入口前

群衆が、押し合いへし合い。

大丸 「キョウ子さーん！キョウ子さーん！」

周りを見渡して、

大丸「キョウ子さん、こんなすごい人やったんやな、あかん、惚れてまう」

大丸、感極まって泣きそう。

大丸「キョウ子さんに、会わせてくれー！一

言、礼が言いたいねん！！」

一夫「会わせてくれー！！」

幸子「会わせてー！！」

老婆「会わせてくんろー！」

幼児「会わせてー！！」

母親「お礼を言わせてください！」

その場に居る者が、押し合いへし合い。

病院からも、大勢の野次馬が出てきて

啞然とする。

○同・玄関・中

病院前広場から、人混みが決壊してき

て、群衆が病院になだれ込む。

○同・廊下

群衆が、廊下をどどど、と走っていく。
松葉づえをついた入院患者や、他の患者、医療スタッフが、あきれ顔で群衆を見送る。

患者の老人「なんじゃ？ありゃ？」

患者の老人の妻「……さあ？」

群衆は、すごい勢いで廊下を走っていく。

○同・階段踊り場

群衆、大丸の一团が、駆けあがってくる。

群衆 A 「おい、キョウ子さんは、3階の30

5号室らしいぞ！」

群衆 B 「ほんまか？」

大丸「よし、待ってるよ……」

群衆、大丸、階段を駆け上がっていく。

○同・廊下・キョウ子の病室前

群衆、大丸、廊下の角を曲がって、キ

ヨウ子の病室の番号を指さす。

(305号室)。

大丸「ここや！ここに、キョウ子さん、おるんや！」

大丸、群衆たち扉を勢いよく開ける。

○同・キョウ子の病室・中

扉を開けて、中になだれ込んできた、

大丸と群衆たち。

中を見てはっとする。

キョウ子が、横たわっている。

傍らで、恵子や優子、比呂、啓、翔が、

涙を流し、びっくりして、大丸たちの

ほうを見ている。

心拍数のバイタルチェック機が、平坦

な音をずっと鳴らしている。

啓・翔「なんや、あんたたち？」

と、涙を流した顔で色めき立つ。

大丸、それに構わず、キョウ子の横たわっているベッドにふらふらと近づい

ていく。

キョウ子は、ぴくりとも動かず、横たわっている。

大丸、ふらふらと、キョウ子の傍に近づくと、傍らで立ち尽くして、

大丸「うそ……。うそやろー!？」

と叫び、青ざめた顔。

○警察署前広場

大勢の人が、立ち並んでいる。

その中央手前に台がしつらえられ、

警察署長が載っている。

群衆の中には、比呂と恵子の姿。

隣に綺麗な女性が花束を持って、優子

を待ち望んでいる。

その台に向かって、盛装した優子が、歩いていく。

壇上に登る優子。

群衆から、溜息がもれる。

群衆D「きれいな人よ……。…」

花束を差し向けられ、お辞儀をしてそれを受け取る。

警察署長は、表彰状を読み上げる。

警察署長「あー、コホン。向田キヨウ子様。

あなたは、数多い善行とともに、8月29日木曜日、午前8時45分。阪急電車内に於いて貴重な人名救助をなされました。この事実により、大勢の通勤客が……」

比呂と、恵子が、複雑な顔をして、お互いの顔を見合わせる。

比呂が、恵子にささやく。

比呂「本当なら、キヨウ子がこの席にいたんですよね？」

恵子「……」

警察署長の表彰状を読む声が終わり、付け加える。

警察署長「……なお、向田キヨウ子さんは、その際、重篤な熱中症になり、ここには、おられません。今回、代理で、妹の優子さんが、表彰状を受け取られます」

群衆は、どよめき、

群衆D「おい、俺、キョウ子さんて人にあつたことないけどよ……」

群衆E「うん」

群衆D「妹さんが、あんな綺麗な人なら、お姉さんは、たいそうな美人だったんだろうな」

群衆E「うん、そうだな」

群衆Dも、群衆Eも、鼻の下を伸ばしている。

優子が、表彰状を受け取ると、群衆から大きな拍手。

優子は、はにかんで、表彰状を群衆に見せる。

再び、大きな歓声と拍手。

群衆の後ろのほうで、大丸が、優子の姿を見て、くさくさしている。

大丸「なんやねん、あれ」

くさくさして、会場から背を向けて、大丸、去っていく。

○酒場（夜）

大丸、飲んだくれている。

酒のグラスを何杯も煽りながら、大丸。

大丸「なんやねん、なんやねん、この結末」

と、大トラになって、他の客に絡む。

大丸「俺はなあー！俺はなあー……！」

と、客Aに詰め寄り、腕を巻きつける

と、

客A「なんなんだよ！あんた」

と、客Aに腕を振り払われる。

大丸「俺はなあー……」

と、今度は泣き上戸。

客A「なんだよ？好きな子にでもフラれたん

かい？」

大丸、半分眠たそうな目で、

大丸「好きな子おー!？」

機嫌を損ねる。

大丸「おっさん！も、一杯」

店主「も、やめとき」

大丸「なんでえ」

店主「も、水やるから、その辺にしとき。あんさん、そのままじゃ潰れるよ」

大丸「へん、アホくさ」

ポケットに手をつ込み、小銭と、紙幣を2、3探ると、

大丸「おっさん、ここ、お勘定置くよ？」

勘定を台の上に置くと、大丸、店を千鳥足ででていく。

○公園

公園の花壇で、ヒガンバナが咲いている。

コスモスも風に揺れている。

公園で、大丸が長袖で、ベンチに座り、休憩している。

深い木陰の草むらから、虫の声もする。子供A、B、Cが、その前で遊びまわっている。

大丸、たばこを吸いながら、それをぼーっと眺めている。

子供A、B、Cが、大丸を見かけ、近寄ってくる。

大丸「なんやー！おまえら」

子供A、B、C「おいちゃん！また、リストラか？」

大丸「そんな、何回も、人がリストラされるわけないやろ？はよ、あっちいけえ？」

子供A、B、C、喚声を上げて去っていく。

大丸、一人取り残され、たばこを吸い続ける。

○同・（夕）

たばこを吸っている、大丸。

ベンチの下には、吸い殻の山。

ポケットから小さな箱を取り出す。

中を開けると、ダイヤの指輪。

感慨深げに眺め、今度は、ぼーっと宙を見つめているが、遠くからキョウ子の声がする。

キョウ子の声「大丸さん！」

その声のほうへ手を振って、

大丸「おお！キョウ子さん！退院おめでと

う！よう、生き返った！元気になったなあ

!!
」

と、嬉しそうに、おちよこをくいつと

飲むふりをして飲みに行くのを促すし

ぐさ。

はにかんだ笑顔のキョウ子が、公園を

駆け寄ってくる。

おわり